

食生活の近代化と家族

田中 秀樹

1. はじめに

米食型、肉食型というように、食生活を型として特徴づけるとらえ方がある¹⁾。特に、食文化論的な見解に、風土に規定された食生活を型として固定的に特徴づけるものを多く見出すことができるが、食生活の型は、必ずしも歴史貫通的に固定的なものではない。日本人の食生活を歴史的にみると、確かに米の位置づけが大事ではあるが、近代以前の庶民が米を日常的に十分に食していたわけではなく、雑穀や芋、堅果類にもその多くを依存していたと言われている。米食型の庶民階層への日常的、安定的普及は、明治以降のことである。食生活の型の固定的特徴づけは、食物がその土地の自然的規定性を帯びる点では妥当するところも大きいですが、生産力の発展に伴い食料の供給形態も変化し、食物の自然的規定性が相対的に縮小する点では誤りであり、食生活の型の発展的構造を見失いがちである。

他方、食生活の型や食慣習の差異は経済発展とともに縮小するのであるから、食生活の規定要因は所得であると考え、食生活の変化の過程を、経済発展による近代化過程ととらえる見解²⁾もある。すなわち、経済成長とともに、食生活は、穀物→畜産物→ビタミン質食品という変化をとげるといふ単線的食生活近代化論である。この見解は、大局的な変化の説明としては妥当するところもあるが、逆に、現に存在する日本的な食生活と欧米型との違いを説明できない。この見解の問題点は、食生活の自然的規定性を完全に無視してしまっている点にある。食生活の素材である作物について

みれば、その土地の自然的影響を強く受けるし、流通の発達により広域的な食素材の調理・喫食が可能になったとしても、まったく自然的規定性から自由になるとは考えられない。また、食素材だけではなく、食生活主体である人間自身が、自然の一部であり、人体生理面でも自然的規定性から完全に自由ではない。

食生活の型の多様性を認めながら、食生活の発展的構造を捉えようとするものとして、食生活様式論³⁾がある。ここでの食生活様式については、人間の生命活動・生命の再生産活動としての食生活の様式とまず広くおさえ、具体的には、食生活の素材である食生活手段と食生活主体との結合様式として把握できる。生命活動・生命の再生産活動としての食生活とは、狭くは食生活素材を媒介とした食生活主体の自己実現あるいは対象化であり、広くとれば、食料生産や供給形態のあり方を含んでいる。また、食生活主体の食料消費を通じた自己実現は、他の人々との関係の中で行われているのであり、食生活主体の存在構造、とりわけそこでは家族の役割が重要である。さらに、食料生産の発展は、食生活手段の商品化として、食料の供給形態を変化させてきており、商品化した食生活手段と食生活主体との結びつきが、生命活動の対象の疎外として現れていることが、現代の食生活問題として現象している。したがって、食生活主体と商品化した食生活手段との結合のあり方の再編が、たとえば、消費者による食品の批判や創造として、食生活主体による食生活様式の再編として現れつつあるのである。

本稿では、以上の枠組みのうち、食生活主体の存在構造としての家族に焦点をあて、食生活の近代化過程と現代の食生活問題における家族について

*広島大学生物生産学部

て考察してみたい。

2. 食生活の近代化と家族形態

(1) 近代以前の食生活と家族・階層

食生活主体が昔から消費者個人として存在しているのではなく、共同体や家族として存在してきたと考えられるが、まず、食生活の近代以前におけるその存在形態の変化を不十分ながら簡単に素描しておこう。

自然採取の時代においては、食生活主体は共同体として自然の中に深く埋もれながら生活していたと考えられるが、自然や食料に関する情報の蓄積の中で、農業が形成・発達したことは、人間が自然を制御し、自然から相対的に自立しはじめたことを意味する。農業の発達は食料生産を飛躍させ、社会的な余剰部分の形成と共に、階級を発生させ、ここに貴族食と庶民食の分離が現れる。階級の発生は、食生活主体の存在形態における第1の変化であるが、具体的には、支配層の食と庶民食の分離と、支配層における食事様式⁴⁾の形成展開がみられる。貴族における強飯から姫飯への変化、武家の登場による和食の発達と本膳料理の形成などがその内容である。他方、庶民は、封建制の展開による厳しい貢租とともに米食から離れ、雑穀、芋、堅果類の雑食を主とした食生活であったと言われている。明治になってはじめて、富国強兵政策とともに、兵隊と女工について米食が普

及し、また官吏のようなサラリーマン階層での米食がはじまり、次第に労働者階級の上層から米食型食生活が広まっていったのである。この背景には、安い外米を貧しい副食とともに多量に食するという、米の単食性とそれによるエンゲル係数の低さが、日本の低賃金構造を保障し、日本資本主義の発達に資したという点も見逃せない⁵⁾。

同時に、労働者階級の形成は、食生活主体の存在形態としての家族の点においても大きな変化を伴っていた。銘々膳にみられた封建的な家族の食生活から、ちゃぶ台を囲む近代的家族の食生活への変化である。

(2) 食生活の近代化過程

明治以降の米食型食生活の確立普及過程は、大正末において米消費のピークを迎え(表1)、主食としての米消費の頭打ちとともに、多様な「洋風化」された副食が現れてくる。「単調な米食とは異なる食事の形態の発生」「米に依存しない新しい食形態」(中山誠記「食生活はどうなるか」岩波新書)ととらえられる食生活形態の登場である。洋食屋の登場や外食の庶民の食生活への浸透が、大正期の大衆文化の発展と相まって進展し、コロッケ、トンカツ、カレーライス等の「日本型簡易洋食」も家庭料理の中にみられるようになってくる。この萌芽的洋風化も、戦争によりその展開を阻まれ、戦後、高度経済成長とともに、本格的な展開をみることになる。

表1 年間1人当り供給純食料(期間平均)

(kg)

	穀類	(うち米)	いも類	でん粉	豆類	野菜	果実	肉類	鶏卵	牛乳・乳製品	魚貝	海藻	砂糖	油脂
1911~15年①	169.6	130.7	57.0	—	15.0	87.2	8.0	1.3	0.7	1.1	3.7		5.4	0.4
1921~25年②	182.5	142.8	53.4	—	18.0	79.9	9.7	2.1	1.5	2.1	8.1		10.9	0.8
1930~34年③	159.8	134.0	30.9	0.8	8.8	73.6	19.7	1.9	2.2	2.7	14.1	0.5	13.2	0.9
1935~39年④	158.0	134.6	26.4	2.0	8.3	73.6	20.2	2.3	2.3	3.5	13.7	0.5	12.4	1.0
1946~50年⑤	147.3	104.5	56.5	0.9	1.7	58.0	11.2	1.5	0.5	3.3	11.1	0.4	2.8	0.5
1951~54年⑥	146.2	100.3	41.9	2.9	6.2	67.3	12.8	2.4	2.7	9.4	19.7	0.5	10.4	1.8
1955~59年⑦	153.7	113.3	39.1	4.9	8.8	83.4	17.6	4.0	4.3	15.9	26.6	0.6	13.2	3.2
1960~64年⑧	149.2	116.7	26.4	7.5	9.9	102.3	24.7	7.0	8.6	28.8	28.5	0.7	16.4	5.4
1965~69年⑨	138.4	103.6	18.6	8.6	9.8	117.3	33.7	10.2	12.0	43.0	30.4	0.8	21.1	8.0
1970~74年⑩	125.7	92.2	16.4	7.8	9.8	115.1	41.2	15.1	14.6	51.5	33.6	1.1	27.4	10.5
1975~79年⑪	118.3	83.8	17.1	8.9	8.7	113.4	41.2	20.2	14.9	57.2	35.0	1.2	25.7	12.2
1980~84年⑫	110.4	76.8	17.7	12.8	8.7	110.2	38.0	23.3	14.5	68.4	34.5	1.3	22.2	13.3
1985~89年⑬	105.5	72.3	19.6	14.9	9.4	110.7	37.8	27.0	15.9	75.9	36.6	1.4	21.5	14.1
1990~91年⑭	103.4	70.0	20.6	15.9	9.5	106.2	36.2	28.7	16.9	84.0	36.5	1.4	21.0	14.1

1) 中嶋信「『日本型食生活論』の基本視角」の表に追加加工(元資料: 田村真八郎「食生活の近代化とは何だったのか」『ジュリスト増刊総合特集』No.28)。

2) 原資料は①~②: 日本学術振興会「国民食料の現状」(39年)、③~⑤: 経済安定本部「戦前戦後の食料事情」(52年)、⑥~⑭: 農林大臣官房調査課「食料需給表」で、それぞれ概念定義が不統一の部分を含む。

戦争と戦後の経済復興期をはさんで、わが国の食生活が戦前水準を取り戻すのは1950年代半ば近くのことである。表1をみると、野菜、果実、肉類、鶏卵等、多くの品目において、そのころ戦前水準に近く、あるいはその水準を突破していることがわかる。しかし、米については、60年頃にかけて一端増加したものの、戦前水準に復帰することなく、その後一貫した減少をみせている。すなわち米の減少にみるように、戦後の食生活は、必ずしも戦前型の食生活へ単純に復帰したのではない。その後の推移は、こうした米やいも類の減少の反面、野菜、果実、水・畜産物の顕著な増加である。特に、畜産物の増加は、ほとんど畜産物消費のみられないところからスタートしているだけに、その伸びがめだつ。このように、経済成長による国民所得の増大とともに、穀物中心の食生活から欧米型の食生活へと接近しつつあることを、この表から読み取ることも可能であろう。

しかし、食生活が単線的な発展形態をとらないことは、こうした洋風化が、完全な欧米型ではなく、「日本の形態」をとって発展したことにも現れている⁶⁾。たとえば、減少しつつあるとはいえ、米は依然として主食の位置に留まっており、欧米諸国では成立しにくい主食概念が、日本では米＝主食として成立している。また、米の減少度合いが、1960年代に比べて現在では半減していることも注目できる。こうした主食としての米と結びついた洋風化の日本の形態が、カレーライスやオムライス、カツ丼であったり、最近のライスバーガーであったりするのである。

このような米食型食生活の洋風化した形態を「日本型食生活」ととらえ、その栄養バランスの良さを評価したのが、1980年の「農政審議会答申」であった。確かに、私たちの食生活は、欧米諸国に比べて、たん白質、脂質、炭水化物の比率がバランスよく、しかも、たん白質、脂質に占める植物性、水産物由来のものが多く、動物性の割合が少ない。しかし、表1にみるように、畜産物の消費量は、鶏卵を除き、いまだ増大傾向は衰えていない。反面、野菜や果実の消費量は、60年代後半から70年代当たりをピークに停滞傾向にある。したがって、栄養バランスもより欧米型に接近しつつあり、バランスを崩しつつある。この結果は、

「日本型食生活」は単線的に欧米型にはならないにしても、より欧米型に接近する可能性をもつし、未だ変化の過程にある食生活型とみた方がよいということを示していると思われる。

また、「日本型食生活」の形成過程は、その内実は、近代化・洋風化であり、畜産物生産が輸入飼料に基づく加工型畜産であることに端的に示されているように、農業と食生活との分断の過程であった。野菜についても、遠隔地の大型産地からの広域流通が拡大し、近郊野菜産地は、都市化とともに縮小していく。「日本型食生活論」を農水省系統の審議会が行ったことは、戦後一貫して強調されてきた食生活近代化論的栄養行政偏重を、国土に根づいた食糧政策と結合することが1つのねらいだったと言われている。しかし、栄養政策と食糧政策の結合のねらいも、実態はそれぞれが二元的にバラバラであり、その後の推移は、先にみたように、さらなる洋風化・近代化であった。

(3) 食生活の近代化と近代的家族

食生活の近代化過程を、食生活主体として担ったのは、先に少しふれたように、明治期に、ブルジョア階層で成立し、官吏や労働者上層でもみられはじめた近代的家族形態である。封建的な家父長的家族形態においては、その二、三代にもわたる直系、傍系家族も含んだ大家族制により、杓子権を持つ主婦の存在と銘々膳による食事形態が中心であったと思われる。しかし、主婦は必ずしも専業主婦ではなく、男性同様、日常の仕事をこなしながらの炊事であった。近代以前の庶民には、食生活はあっても料理といえるほど手間をかけるものはそれほど見当たらない。料理といえるほど手間をかける時間も余裕もなかったのである。

大正末ごろからみられた食生活の洋風化は、洋食屋など外食の普及とその家庭料理への浸透として現れたように、近代的家族形態とそこにおける専業主婦の登場と相まっていた。専業主婦という女性の存在形態は、大正・昭和初期には、都市下層の細民層以外の労働者階層にも次第に拡大しはじめており、戦後の経済成長期とともに普遍化したのであるが、実は、家庭での家事・育児領域の確立も、こうした専業主婦の歴史的登場と同時なのである。専業主婦の社会的誕生は、同時に、そ

の主婦が担った家事・育児領域を社会的に確立させ⁷⁾、新たな都市型のライフスタイルをつくりあげていった。概して、料理は支配階層のもとで確立するが、近代的家族の登場とともに家庭料理が成立し、料理の大衆化が進むのである。料理の大衆化が進めば、その食材を購入する小売店が求められ、零細の消費に対応した零細分散的な専門小売店（八百屋、魚屋等）が必要となる。また、こうした大量の小売店への分荷機能が不可欠となり、卸売市場が発達する。また、家庭内での家事・育児領域の成立は、こうした流通機構に対して、消費者として対応する基盤を与え、消費者運動が成立する。食生活についていえば、流通や生産のあり方を含めた食生活様式における主体として、流通・生産に対して規制を加えようとする食生活様式再編を取り組む家族としての食生活主体の成立である。

3. 食生活の現段階的特徴と家族

(1) 現代の食生活—野菜消費を中心に

戦後の食生活の変化の中で、米が減る代わりに、

野菜や水・畜産物の消費量が拡大してきたのは、先にみた通りである（表1）。この過程は、米食型食生活の洋風化の過程であり、主食としての米中心の食生活から、副食が多様化し豊かになっていく過程であった。その変化の内容を、もう少し詳しく、野菜を事例にみていくと次のようになる。

まず第1に、野菜作の推移を表2にみると、根菜類が作付面積、収穫高共に減少した反面、洋菜類の伸びが著しいことである。つまり、野菜でも洋風化は極端に進行しており、米食型食生活と結びついた伝統野菜が縮小し、レタス、セロリーといった洋菜類が伸長していることがわかる。また、伝統野菜の縮小は、同一野菜の中においても進行しており、たとえば、大根では、作りやすく、規格化しやすい青首大根が、各地の伝統的な大根を駆逐してきた。卸売市場流通の広域化とともに、伝統的な野菜が駆逐され、代わりに作りやすく、規格化しやすい品種への交代が進んでいる。ところが、栄養的には、各地の風土に根ざした伝統的な大根の方が、概して優れている。

第2に、1970年代に入って、家庭での野菜購入量が減少しだす反面、支出金額は増加し、野菜購

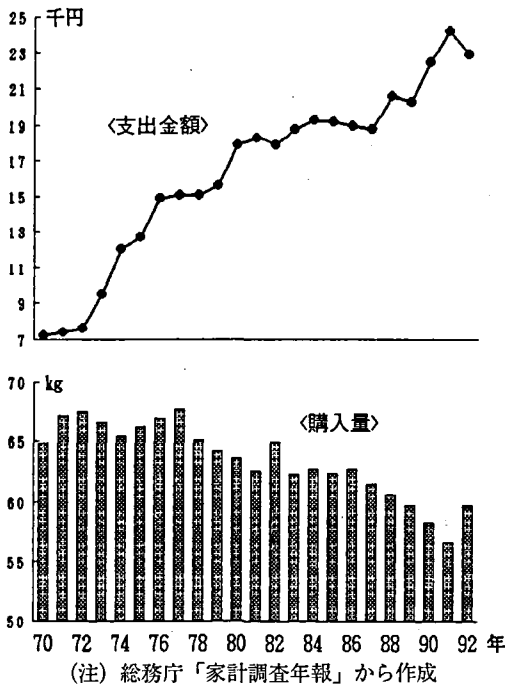
表2 野菜作の推移

		1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	90/60
作付面積 1000ha	根菜類	195	195	179	155	156	157	148	75.9
	葉茎菜類	104	180	175	159	157	157	150	144.2
	果菜類	95	106	97	82	78	75	70	73.7
	豆類等	56	63	63	61	67	72	74	132.1
	果実的野菜	40	48	53	60	59	54	51	127.5
	洋菜類	2	6	17	22	30	35	39	1,950.0
	計	492	598	583	540	547	550	531	107.9
収穫高 1000t	根菜類	4,144	4,554	4,359	3,957	4,274	4,311	4,074	98.3
	葉茎菜類	2,926	4,448	5,125	4,943	5,204	5,328	5,022	171.6
	果菜類	1,587	2,279	2,781	2,963	2,903	2,707	2,539	160.0
	豆類等	438	498	548	554	589	636	660	150.7
	果実的野菜	773	829	1,163	1,574	1,468	1,382	1,391	179.9
	洋菜類	37	128	363	509	681	805	871	2,354.1
	計	9,905	12,736	14,340	14,500	15,119	15,169	14,555	146.9

資料；農林水産省「作物統計」

注1) 根菜類（ダイコン、カブ、ニンジン、ゴボウ、レンコン、サトイモ）、葉茎菜類（ハクサイ、キャベツ、ホウレンソウ、ネギ、タマネギ）、果菜類（ナス、トマト、キュウリ、カボチャ）、豆類等（サヤエンドウ、エダマメ、サヤインゲン、未成熟トウモロコシ）、果実的野菜（イチゴ、スイカ、メロン）、洋菜類（レタス、カリフラワー、セロリー、ピーマン）。

図1 年間1人当り野菜購入量と支出金額の推移

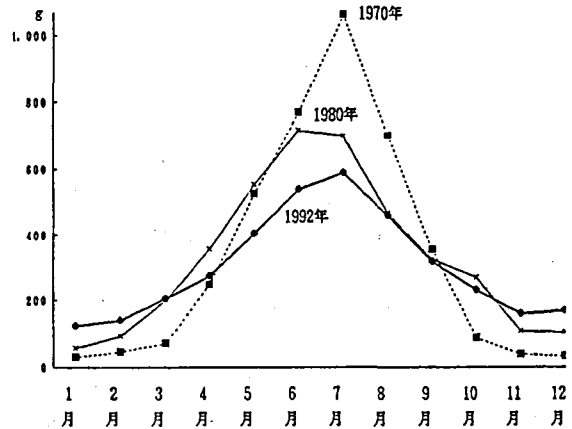


入量と支出金額の乖離減少が現れることである(図1)。野菜購入量の減少は、伝統的な重量野菜の消費が減り、軽量の洋菜類の消費が増えていることと関わっていると思われるが、いずれにしても野菜の量的な消費が減少していることは事実である。支出金額の増大についても原因は同じであり、つまり洋菜類等の「高級」野菜の消費が増えたことが影響していると思われるが、この点は、卸売市場において単価の高い「高級」野菜を取り扱う傾向とあながち無関係でもなからう。同時に、季節外れの野菜消費、つまりハウス野菜の増加も支出金額の増大に結果する。

このハウス野菜の増加に見られる野菜の通年消費現象が第3の点である。従来、旬という言葉があるように、野菜消費には季節感がともなっていたが、ハウス野菜の増加と共に、こうした旬の野菜消費が減少し、季節外れの野菜消費が増加しつつある。たとえば、トマトについて、1970年、80年、92年の月別購入量を比較してみると、明らかに、旬の時期である夏場の消費が減り、冬場の消費が増加していることがわかる(図2)。ここでは、トマトのみ掲げたが、きゅうり、白菜等も同様で

ある。外食レストランで、よくおいしくもないトマトが皿にのっていることがあるが、図は、家計調査であるから、家庭でも冬場にトマトを食べ始めている。また、たとえ夏場のトマトとはいえ、卸売市場の集散市場化とともに、流通期間・距離共に長くなり、完熟しないままのトマトが出荷される場合が多い。さらに、先ほどの伝統野菜の例と同じように、露地栽培の野菜に比べ、ハウス野菜は概して栄養的にも劣る。

図2 トマトの1人当り月間購入量の変化



以上のように、今日の野菜消費の現状は、副食として品目も増え、見かけは豊かになったように思われるが、内実はそうではない。70年代以降の野菜消費をめぐる事態は、単なる量的な減少だけではなく、旬の消費が後退し、栄養的にも優れている伝統品種、在来野菜が縮小し、市場流通に乗りやすく作りやすい野菜・品種へと交代していく過程であったのである。この背景には、卸売市場流通の集散市場化、広域化とともに、家庭内料理の変化、たとえば、野菜の煮物から生食へ、といった動きもあるだろう。後者は、家庭での炊事時間の減少や女性の就労化、家庭内での主婦の位置の変化といった問題とも関連してくる。

ここで、都市消費者の野菜消費の一端を、生協の野菜ボックス産直を利用する組合員のアンケート結果から垣間見ておこう。料理方法のわからない、あるいは手間のかかる野菜は敬遠される傾向にあるようだ。表3は、生協ひろしまの支所産直委員会が行ったボックス利用者へのアンケート結果であるが、この「ボックスに入れてほしい品目・

表3 野菜ボックスに入れてほしい品目・入れてほしくない品目

順位	毎回入れてほしい物	隔週で入れてほしい物	シーズンに1度入れてほしい物	入れてほしくない物
①	きゅうり 773	キャベツ 482	ふき 216	ずいき 228
②	ほうれん草 616	大根 477	スイートコーン 182	モロヘイヤ 117
③	ねぎ 459	人参 330	たけのこ 175	みょうが 174
④	トマト 338	白菜 296	みょうが 168	にんにく 103
⑤	レタス 318	レタス 277	かぼちゃ 144	ササゲ 80
⑥	人参 306	ごぼう 237	にんにく 106	オクラ 59
⑦	キャベツ 199	ねぎ 191	枝豆 106	なめこ 58
⑧	生しいたけ 194	ほうれん草 186	えんどう 86	ふき 58
⑨	ピーマン 156	ピーマン 180	ごぼう 80	たけのこ 58
⑩	プチトマト 151	生しいたけ 176	オクラ 77	間引きごぼう 49

注1) 生協ひろしま野菜ボックスアンケート (庚午支所分) 1990年1月実施より

2) 数字は回答者数。全回答者は913名。

入れてほしくない品目」から、都市消費者の野菜消費の一端が浮かび上がってくる。野菜ボックスに「毎回入れてほしい物」は、生食ないしは加工が簡単な、すぐ食べられる野菜が多い。「隔週で入れてほしい物」は、キャベツ、大根、人参、白菜、ごぼう等、根菜類や重量野菜が目立っている。「隔週」とは、一週間で使い切ることができないという意味であり、大根一本、白菜一玉を一週間で使い切れないうのが、今日の都市消費者の食生活の現状ということになる。根菜類などは煮物等により多量の消費が可能であるが、生食では野菜を食べる量も限られる。

同じ表で、「入れてほしくない物」には、ずいき、モロヘイヤ、ササゲ等のなじみのない野菜が多い。料理方法がわかりにくい、手間がかかり面倒な点が敬遠される最大の理由であろう。生食ですぐ食べられる野菜が歓迎され、手間のかかる野菜が敬遠されるのは、流過程の問題とともに、先にみた、女性の就労化や家庭での主婦の位置の変化といった問題も背景にあることを忘れてはならない。同じアンケートで、生協の野菜ボックスを利用する理由の第3位に、「買物に行く手間がはぶけた」があがっていることにも、家事の合理化との関連性をみることができる。

(2) 食生活主体としての家族関係の変化

食生活主体としての家族の存在形態の現代的変化は、家事領域の確立を担い、料理の大衆化と食

生活の近代化を担った専業主婦の減少に端的に現れている。専業主婦は、1960年代にピークを迎え、その後は女性の就労化が進展しているのが現状である。さらに、主婦、婦人という言葉から女性という言葉が多く使われるようになったことは、それ自体家族における女性の位置の変化や志向性の変化を示していると思われる。専業主婦の減少は、単に就労化が進んでいることだけではなく、その役割としての側面でも、すなわち専業主婦についても、その家事時間、とりわけ炊事時間が減少し、自由時間が増大していることにも現れている⁸⁾。表4をみると、家庭婦人の平日の炊事時間は、1970年の2時間58分から90年は2時間30分へ減少の一途である。土・日の炊事時間も同じく減少している。また、働いている女性の平日の炊事時間の計は、この20年間大きな変化はなく、約1時間20分前後と少ない。これ以上の時間の節約が困難なのであろうか。さらに、調理食品の利用など、家事と外食の中間領域(中食)が拡大しつつあることも、女性の就労化や志向性の変化の反映であると思われる。表5は、世帯類型別の食の外部化をみたものであるが、外食、調理食品共に、食費支出に占める割合が伸び(合わせて食費支出の約26%,1992年)、とりわけ共働き世帯での外部化比率が高いことがわかる。とはいえ、1人有業世帯での外部化比率も拡大しており、また高齢者世帯でも外部化が進んでいることが注目できる。表6は、大都市と町村の食の外部化を示しているが、

表4 家事時間の変化 (全員平均時間)

		平 日					土 曜					日 曜				
		'70年	'75	'80	'85	'90	'70年	'75	'80	'85	'90	'70年	'75	'80	'85	'90
家庭婦人	時間分	2.58	2.47	2.50	2.42	2.30	2.57	2.47	2.43	2.36	2.24	2.35	2.26	2.27	2.15	2.09
	炊 事	.56	.51	.53	.52	.44	.54	.52	.49	.47	.43	.43	.42	.40	.39	.35
	洗濯	1.03	1.04	1.16	1.22	1.11	1.02	1.03	1.08	1.16	1.13	.47	1.01	1.00	1.05	1.04
	買い物	.47	.46	.42	.43	.45	.49	.53	.48	.48	.51	.45	.50	.47	.44	.50
	子どもの世話	1.07	1.16	1.04	1.04	1.10	.53	1.13	.57	.53	1.05	.42	.49	.40	.34	.45
家庭雑事	.40	.55	.55	.59	.58	.39	.47	.53	.52	.55	.35	.50	.52	.54	.53	
女の勤め人	時間分	1.18	1.10	1.16	1.19	1.21	1.13	1.13	1.22	1.16	1.23	1.26	1.25	1.33	1.25	1.25
	炊 事	.19	.17	.15	.15	.15	.22	.18	.20	.18	.23	.36	.36	.35	.37	.34
	洗濯	.24	.21	.28	.33	.36	.24	.23	.32	.32	.42	.35	.45	.48	.53	.55
	買い物	.19	.18	.18	.20	.22	.25	.28	.29	.31	.37	.40	.43	.41	.45	.45
	子どもの世話	.12	.12	.13	.14	.14	.10	.14	.13	.11	.15	.09	.13	.13	.10	.13
家庭雑事	.17	.18	.24	.33	.25	.14	.22	.26	.27	.31	.39	.42	.44	.49	.45	

出所：NHK 世論調査部編「図説日本人の生活時間」1990。

表5 世帯類型別の食の外部化 (%)

		勤労者世帯			高齢者世帯
		共働き世帯	1人有業世帯		
外食	1980	13.2	16.6	13.0	—
	1985	15.1	18.4	15.3	7.9
	1990	17.3	19.7	16.9	10.7
	1992	17.4	20.2	16.9	10.7
調理食品	1980	5.7	6.3	5.4	—
	1985	6.5	6.9	6.1	5.9
	1990	8.2	8.6	7.9	7.7
	1992	8.7	9.2	8.4	7.8
合計	1980	18.9	22.9	18.4	—
	1985	21.6	25.3	21.4	13.8
	1990	25.5	28.3	24.8	18.4
	1992	26.1	29.4	25.3	18.5

資料：総務庁「家計調査」

注1) 世帯類型ごとの食料費支出額に占める割合である。

2) 高齢者世帯は、世帯主65才以上(全世帯)である。

表6 大都市と町村の食の外部化

(円、%)

	一般外食		調理食品		主食的調理食品		その他調理食品	
	大都市	町 村	大都市	町 村	大都市	町 村	大都市	町 村
1980	8,814	5,763	4,567	3,421	920	483	3,647	2,939
1985	11,147	7,241	5,403	4,306	1,288	781	4,115	3,524
1990	13,592	9,070	6,859	5,795	2,026	1,487	4,834	4,308
1992	14,373	9,756	7,381	6,582	2,290	1,841	5,091	4,741
92/80	163.1	169.3	161.6	192.4	248.9	381.2	139.6	161.3
1980	13.4	10.8	6.0	5.3	1.3	0.8	4.8	4.5
1985	15.2	11.9	6.5	5.9	1.6	1.1	4.9	4.9
1990	17.2	13.1	7.8	7.5	2.3	1.9	5.4	5.6
1992	16.3	12.4	8.4	8.4	2.6	2.3	5.8	6.0

資料：総務庁「家計調査」、都市分類も「家計調査」による。

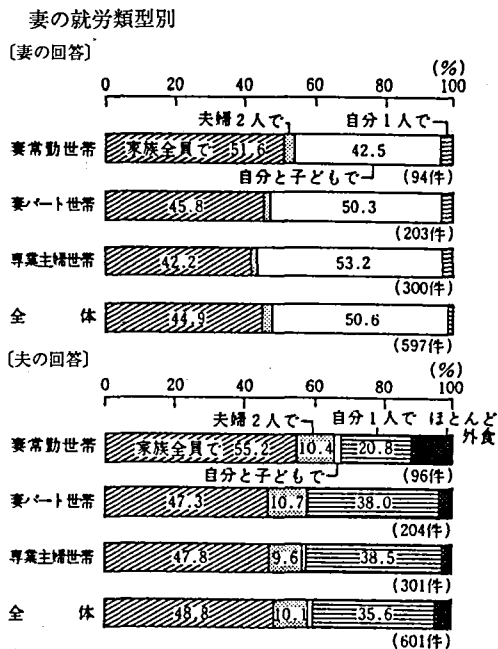
注) 上段は1人当たり支出額(消費者物価指数の変化は加味していない)、下段は、食料費支出に占める割合。

80年から92年の12年間で、調理食品の伸びは、大都市170%、町村190%と、約2倍近くに伸びており、さらに町村部にも拡大している様子がわかる。食料費支出に占める割合は、一般外食はさすがに大都市が高いが、調理食品は同じ8.4%である。このように、大都市、町村に関わらず、外食に出ないまでも、家庭内での調理食品利用（中食領域）が拡大していることがわかる。

食生活における家族関係の変化としては、孤食の増加が指摘されている。「子どもの孤食」（岩波ブックレット）によれば、朝食をひとりで食べる子どもが増加している。こうした子どもの孤食とともに、同じテーブルを囲んでいても異なった料理を食べる個食のような、食の個別化、個性化の傾向も現れているように思われる。

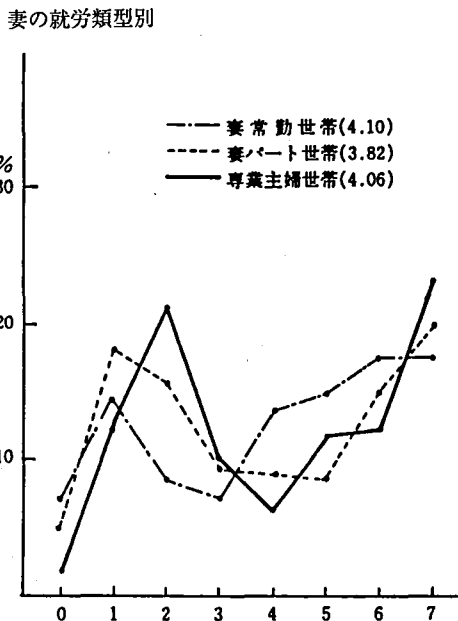
食をめぐる家族関係について、もうすこし詳しい調査が、家計経済研究所の「現代核家族の風景」（1993）で行われているので、その結果をみてみよう⁹⁾。そこでは、妻の就労類型別に、朝食と夕食が、それぞれ分析されている。企業の長時間労働との関わりで家族の摂取状況がより特徴的に出てくる夕食についてみると、次のごとくである。まず、夕食の摂取状況については、自宅で夕食をとる者の割合が、妻が常勤で働いている世帯では、夫・妻共に少ない。専業主婦世帯、妻パート世帯では、自宅で夕食をとる妻は、約9割～9割5分、夫で6割5分～7割なのに対し、妻常勤世帯では、妻7割、夫5割といった状況である。つまり、妻常勤の共働き世帯では、夫・妻共に自宅で夕食をとる機会が少ない点が第1である。次いで、食卓を囲む家族関係についてみると（図3）、夕食を家族全員でとる者が、専業主婦・パート世帯では、妻45%前後、夫約47%なのに対し、妻常勤世帯では、妻50%強、夫55%強と、明らかに妻常勤世帯の方が、家族全員で食事をとる割合が高いのである。つまり、共働き世帯の場合、夫・妻共に自宅で夕食をとる機会自体は少ないが、自宅で夕食をとる時には、家族全員でとることが多い点に注目できる。さらに、家族全員の夕食回数を、妻の就労形態別にみると（図4）、妻常勤世帯と妻専業主婦世帯が平均約4.1回であり、妻常勤世帯では、週7回とるケースは少ないものの、4～6回が他類型を上回っている。専業主婦の場合は、2回（つ

図3 夕食の家族関係



出所：家計経済研究所「現代核家族の風景」1991。

図4 家族全員の夕食回数



(備考) カッコ内の数字は、各類型の家族全員での夕食回数の平均値

出所：家計経済研究所「現代核家族の風景」1991。

まり土・日か)と7回に分裂しており、家族全員が揃うグループと揃わないグループに分解する傾向がみられる。

大変興味深い結果であるが、ここからは、妻常勤の家族形態では、自宅での夕食機会が少ないにしても、その少ない夕食の機会を家族全員でとろうとしている志向性が読み取れる。このデータは、ライフステージ別にバランスよくサンプリングしているので、妻常勤世帯が特に年齢が低いわけではない。逆に、専業主婦世帯で、夫・妻共に自宅で夕食をとる機会が多い割に、その夕食に家族全員が揃わないのは、夫の残業のためであろうか。つまり、企業社会の長時間労働を支えてきたのは、こうした専業主婦の存在であり、日本型企业社会はこうした主婦の労働を踏み台にして維持されてきた面があると思われる。共働き家族においては、妻も働いているため、夫の長時間労働を支えきれない構造があり、強制的残業等、企業社会における種々の拘束性と、家事・育児領域との衝突・矛盾を日常的に解決することを迫られる。妻の就労による経済的・人格的自立化も相まって、家族関係の結びつき方が、財産や資産原理的な家的なものから、より人格的なものへと変化する可能性も現れつつあるように思われる。その表現が、夕食における家族全員での食事を大切にするという志向性としても現れているのではないか。また、共働き家族が、外食や調理食品利用などの中食が多いことは、先に見たとおりであるが、そうした外食や中食なども、少ない炊事時間を増やすよりも、その時間を家族の団欒にあてようという志向性とも関わっているのかもしれない。

さて、食生活における家族、食生活主体としての家族のあり方について、歴史的に概括してきたが、現状については、食生活内容や食料供給形態の分析に比べてデータも少なく、研究も不十分なように思われる。銘々膳からちゃぶ台への変化は、家族の共食としての食卓を成立させ、さらにダイニング・テーブルの普及は、専業主婦の普及と共に、食卓をめぐる団らんとして、食における家族像をイメージ化させてきた。こうした食生活における家族とは、家族関係・形態の変化の食生活への反映でもあった。今後、どのような家族関係・

形態があらわれるのか、その一端は、本論でみた共稼ぎ家族の中に現れているのかどうか、まだ、未整理な点が多いが、食生活をめぐる家族の現状と展望の分析については今後の課題としたい。

注

- 1) たとえば、鯖田豊之『肉食の思想』中公新書、1976年。
- 2) 中山誠記『食生活はどうなるか』岩波新書、1960年、同『食料の経済学』同文書院、1964年。
- 3) 美土路達雄『食生活様式に関する試論』『名寄女子短期大学紀要』15巻、1983年、同『食生活様式ノート』『食の科学』69～77号。
- 4) 児玉定子『日本の食事様式』中公新書、1980年。
- 5) 吉田忠『食生活変貌のベクトル』農山漁村文化協会、1988年。
- 6) 吉田前掲書、81ページ。
- 7) 木本喜美子『都市と女性—都市生活のなかの家事と主婦』『シティライフの社会学』時潮社、1991年。
- 8) NHK世論調査部編『図説日本人の生活時間』日本放送出版協会、1990年。
- 9) 財家計経済研究所編『現代核家族の風景』大蔵省印刷局、1991年。
- 10) 田中秀樹・三国英実『生協産直の発展と環境保全型産地形成』『広島大学農業水産経済研究』第5号、1993年。

Modernization in Dietary Life and Family Form

Hideki TANAKA

In this paper, I discussed the modernization in dietary life related with the appearance of modern family type.

With development of agricultural production, our dietary life has changed rapidly, especially livestock products consumption has remarkable increased. Westernization has developed on the base of the Japan style in dietary life which was characterized by the bulk of rice and poor sidedishes. Though that brought improved nutritional balance, recently excessive westernization, e.g. intake of animal fat and protein, has advanced beyond the balance point of nutrition.

Modernization in dietary life has been brought by not only increased foodstuffs supply but also changing family form. A change from small dinner tables, by the name of Zen, for each family member to a dining table for a family stood for the appearance of modern family type and housewife. It corresponded to the popularization of housecooking which carried westernization of dietary life.

Recently, many housewives have begun to work and socialization or externalization of food consumption has expanded. Restaurant chains and lunch businesses spread all over the country, and also diversification in eating style has spread. "Why do you eat alone?" is the name of popularized book, i.e. the style of eating alone in a family has been increasing. But it has more cases in the family carried by housewife than the family that has working couple.